

# 泉

いずみ

―目次―

表紙 「永代経・紙芝居」

百折不撓

野呂大悟

菓子鉢と樋

野呂美道

55年ぶりの北海道巡回

野呂美道

舟を編む

野呂美道

連載「私の出会った神様たち⑳」

ともに歩み 命に寄り添う⑫ 浄香

掲示板・お知らせなど

\*付録 ハザードだより(能登震災報告)



幾たびの荒波超え 同窓の友の法話に 優しさ溢る 博子

心地よい風が吹く季節となりました。これから雨が降り続く梅雨の季節がやってきます。先月の永代経は多くの方々にお手伝い頂きました。また、ご参詣いただいた皆さま、本当にありがとうございます。

今回は広島県の中富正海師にご法話をいただきました。母（前坊守）の同級生という事で、何度も安泉寺には足をお運び頂いております。私の、住職継承法要の時にも、ご法話をいただきました。

毎回、中富師のご法話は、身近なことを中心にお話をされるため、心の中で「そうそう」と思いつながら、我がごととして聞くことができます。見た目や身なりから人は話せることや話すことが変わる。本当の悩みや苦しみの解消は、人に話すことから始まるが、見栄や世間体が時には邪魔をしてしまい、「こんな事言ったら失礼かな。こんなこと言えないな。こんなこと言ったら馬鹿にされるんじゃないかな。」となってしまう。特にお寺の坊主となると、袈裟や格好が逆に緊張感を漂わせてしまう事も時にはあるのでしょうか。

昔の高僧「一休宗純（一休さん）」のエピソードでは、「ある大地主の家の法事がせまっている中、一休宗純という高僧がいると噂で聞いた主人は、是非一休さんに法事を勤めてもらいたいと依頼をした。しかし、どこの誰かも分からぬ一休さんは、法事の前に主人の家へ乞食の格好をして訪ねた。「何か食べ物を与えて欲しい」と。主

人は、「お前みたいな者に与えるものなどない」と追い払った。次の日に一休さんはそれは立派な袈裟を着て主人の家へ訪ねた。「どうぞどうぞ、お待ちしておりました。座敷におあがりください」と伝えらると、一休さんは袈裟を脱ぎ捨て、袈裟を座敷に置いて「お前が必要なのは私ではなく、この袈裟であろう」と言って、帰っていった」という話があります。

私たちは大なり小なりそのような目があるという事。とかく、坊主は立派な衣を着て、良い声でも勤めようものなら、「有り難い」と感謝され、本来の目的を見失ってしまう事すらあるかもしれません。

私も身なりや見た目や、肩書や、職業など様々な要因で人を判断したり、レベルを貼ってしまい、本来向き合ふべきことに向き合えていないのではないかと反省させられました。

私は知的に障がいのある方々の生活をお手伝いさせて頂く仕事をしておりますが、そこへ通われる利用者の方々の多くは、人を見た目や身なり、肩書や職業で判断したりすることはなく、目の前の生身の人間として真正面からぶつかり、関り、良いものは良い、嫌なものは嫌だと真剣に向き合ってくださいます。

袈裟やお経は坊主にとっては意味のある大切なこと。しかし、それを身につける、読経する「私」がどうあるべきかと考えていかねば！と感じました。

◆写真を見てほしい。安泉寺のロゴマーク入りの素敵な菓子鉢を献上してくれたのは、檀家さんの迫屋（さこや）さん。先日の永代経でお饅頭を入れて皆さんにお披露目した。萩焼の様な淡い色使いで、模様は蛸唐草というもの。◆安泉寺の什物として、寺宝にしたい。迫屋さんは、日本文化に造詣が深い。趣味の一つが歌舞伎鑑賞。はるばる東京にも見に行く。そして、焼きものづくり。これも奥が深い趣味だ。◆私も伝統的な日本文化は大好きだが、時間とお金が足りないので、せいぜいテレビで「美の壺」なんていう番組を視るくらゐが関の山。わざわざ安泉寺のために菓子鉢を焼いてくれるところが嬉しい。住職がデザインした安泉寺のロゴマークはこれからも各種場面で登場させたいと思ってる。迫屋さん、どうもありがとう、次はお茶碗を頼みます。



◆次に紹介したいのは、安泉寺本堂前の樋の写真だ。先日強風にあおられて、南側の樋が損壊した。そして、その後、私の同級生の堀田君に修理を依頼した。彼は前よりもはるかに丈夫で素晴らしい

樋を作ってくれたので紹介する。◆写真を見ると分かるように、堀田君は今回の樋の上部に箱をつけてくれた。そして、4メートルのステンレス材を継ぎ目なしにまっすぐ下におろしてくれた。その鮮やかな技に私は驚嘆した。◆損壊を免れた北側の銅製の樋は、3か所もつないであった。見比べると一目瞭然だ。しかしながら、今回は南側の樋のみを修繕したので、正面から見るとアンバランス。できれば両方新調したかったが、断念した。◆理由は、皆さんから頂いている保険で修理するからだ。このための保険だから大変にありがたかった。将来的に本堂の施設が破損しても、この保険が大いにものを言ってくれるはずだ。◆ただ、手続きをするために、安泉寺の寺印の印鑑証明を取るのが大変だった。宗教法人は法務局でないと証明が受けられない。数十年前に届けた印鑑を確認し、やっとの思いで証明を受けることができた。これも勉強だ。◆堀田君はこだわりの板金屋。自分の死後も、樋が人目にさらされることを見越して、完璧な仕事をした。「素晴らしい技だ。」とが職人の矜持（プライド）でもある。堀田君、



修復後



修復前

◆5月7日〜9日まで、私は北海道の函館にいた。半年前から、岡崎市に住む大学の先輩が、松前の先輩に会いに行きたいと申し出た。◆写真にあるように、55年前、私たちは人形劇の機材を持ち、一か月前北海道のお寺さんを巡る旅をした。子供たちに公演をして、そのお布施で次の寺を回るという「どき回りツアー」だ。◆当時、音楽や効果音の再生はオープリンリールテープレコーダーだった。ソニー製で10kgあった。それに自分の荷物と人形劇のセットを抱えて旅をした。総重量25kg超え、それを抱えて、青函連絡船の乗り場まで走った。時間が迫っていたから。◆当時20才そこそこの学生の私が、初めて北海道の土を踏んだ。◆松前の先輩は、当時の私の憧れだった。児童劇、人形劇など幼児文化に詳しく、芸術性に溢れた舞台を見せてくれた。以来、私は人形劇の世界にはまった。◆彼の巡回用の人形劇の作品は「コロポックル」。アイヌ伝説の落の下の神様の物語。愛くるしい子供の神のお話だ。◆作詞・作曲を部員が作成し、フルートの調べにのせて録音した、オリジナルの曲を携えた。なんと、55年を経て、もなお、その曲が歌詞と共に鮮明に甦って来る。◆巡回中の苦労もあった。エピソードもいっぱいできた。私の印象にある北海道の思い出は、若葉の青臭い匂いがした。お寺に集まる子供たちは、目を輝かせて私たちの公演を楽しんだ。別れる時はどこまでもバスを追いかけてきた。抱きつかれて、青洩（ばな）で服がカピカピになることもあった。素朴な感動と懐かしさで、今も胸が熱く



55年前



なる。◆55年経った私たちの写真がある。時の経過は、私たちをそれぞれ道の道に進ませた。先輩は函館の大学の学長、先輩は本山の参務を勤めた。しかしながら、いずれも自坊を持ち、住職を兼務する傍ら、教育や本山維持に尽力した。私も教師として住職を兼ねて勤務した。◆3人に共通することがある。現在、後継者があり、寺院経営にも前向きで、自坊をしっかりと守っているということだ。◆そのような境遇の3人が元気なうちに再会しようと思えば腐心してくれただろう。お礼の言いようもない。後輩は何度も何度も嬉しい嬉しいを連発していた。ここに55年ぶりの巡回は成功裏に幕を閉じた。メンバーは当時の学生に戻って、旧交を温め合った。このツアーを生涯の糧にしたい。

◆NHKのドラマで、「舟を編む」という番組があった。辞書を作るスタッフのチームワークと執念を扱った地味なドラマだ。◆今は電子辞書が普及し、紙の辞書はあまり人気がないかも知れない。しかし、時代が変わろうと、私には紙の辞書が良い。◆有名なのが新明解国語辞典。「人間」の意。「他の人間と共になんらかのかかわりを持ちながら社会を構成し、なにほどこかの寄与をすること」が期待されるものとしての「人」とある。うーんと考えさせられる。◆ところで、私が思ったのは、「大渡海」という言葉。この辞書の名前だ。もちろんドラマでの設定だから、実際にあるわけではない。ドラマでは「広辞苑」が引き合いに出される。ライバルという位置づけだろう。◆大渡海は大会と発音は同じ。東京の様な街を連想させる。今の時代の文化を凝縮するイメージか。◆私は大渡海の意味を考えた。舟を編むとあるからには、大いなる言葉の海を渡る完璧な船が大渡海なのだろう。そういう気負いが感じられる辞書名だ。◆私はこれを「人生という荒海を渡る、絶対に沈まない完全な舟」という意味に置き換えた。言葉の海を人生の海に読み替えた。海は私たちに限りない恩恵をもたらすと同時に、時には津波を起し、嵐を呼び、人の命を奪う。だから古来、人々は海に感謝し、海を恐れ、海と共存する生活を脈々と続けてきた。◆人生も全くその通り。運のいい人生もあれば、どれだけ誠実に生きても、不運が続く人生もある。◆しかし、たとえどんな人生を送ろうとも、この船に乗れば安心だ。

タイタニック号のように、氷山に衝突しようともすぐに修復し、一切浸水しない。夜に酔っぱらって、海に落ちる乗客があっても、すぐに探知し、救い上げる。◆一体そんな船が存在するのだろうか？ 私は「大渡海」の言葉の響きが「難度海」という響きにそっくりなのがとても気になっていた。つまり渡るのが困難な海（人生）ということ。しかし、その海を安心して渡る教えがあると、祖師（おおもとの師匠）親鸞聖人は、代表する著作「真実教行証文類（しんじつきょうぎょうしようもんるい）総序」で高らかに述べる。◆「難思の弘誓（なんしのぐぜい）は難度海を度する大船（お念仏は難度海を渡してくれる完全な船である）」と。◆ところで、私たちはこの船で、一体どこへ行くのであろうか？



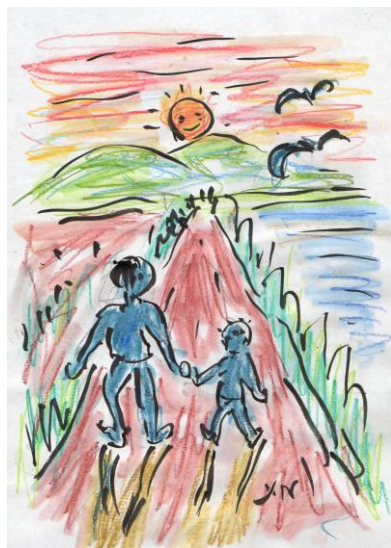
## アキラ④

◆隅田川の土手を二人で手をつないで帰ってききました。時には夕方になって夕焼けが出る時がありました。そして、夕焼け小焼けを歌いながら帰ってききました。夕焼け小焼けという歌は、カラスといっしょにみな帰るです。子供を愛した人が作った歌だと僕は思うのですけれど。それなのに、こんな良い歌が日本にあるのに、こんなひどい目に会う子供がいるといっしょに帰りましょ、と言ったって、アキラくんが帰るところは、お母さんの待つ家ではなく、汚い汚い、食べるものもろくにないような戦争孤児の施設なのです。今思い出しても、今でも胸が痛みます。僕はアキラくんの栄養失調のうすっぺらな手をつかんで歩きながら、「あー、僕は作家になれたら。」と思いました。◆作家になる夢は漠然とありましました。書くことは好きでしたから。文学少年でしたから。でも、本当に作家になりたいと思っただのはこのときでした。「こういう少年のことを書いておこう。そして、戦争を知らない人が一杯出てきたときに、過去のおいてアキラのような少年が一杯いたということをお話するには、見た人間が、知っている人間が書かなきゃいけない。」ということを書きました。◆一生懸命勉強しようと思いましたが。それから作家になる決心をしたの

です。◆作家になるまで大変でしたし、それから大変で、その後のお話も一杯ございますけれども、時間がございませぬ。今日はこのへんで終わりにいたしますけれども。アキラくんも僕の神様でございます。僕を作家にしてくれた、一生の僕の仕事を与えてくれた神様だと思っております。

◆このアキラくんのことを書きましたら、小学二年生の男の子から手紙が来しました。小学二年生でもよく分かってくれるのですね。便箋が濡れて、しみができていて、これはきつと泣きながら書いてくれたんだらうと思いました。◆その子は戦争のことをとても怒っていました。「アキラさんは今どこでどうしているのですか。」と聞いていました。残念ながら分かりません。しかし僕はお母さんと会ったとき、お母さんを悲しませないように、一生懸命あの遠い距離をテクテクテクをテクテク歩き続けて、良い人を見つけて、お父さんになって、自分の子供に平和の大切さを、政治でも何でもなく、素朴な人間の願いとして、訴えているはずだと僕は信じています。

(続く)



ともに歩み、命に寄り添う

第十二回 父とひとり娘の卒業式

浄香きよか

生まれ育った実家のお寺から父をお浄土に送り出したい。

それが私の願いでした。納棺の時には、父が「親父の形見」と大切にし、お仏壇の横にかけていた私の祖父の教衣と輪袈裟を葬儀屋さんにつけていただき、すべての準備が整いました。悩みは、お葬式をどのように行うかということ。コロナ禍では家族葬が主流になっていましたが、父が亡くなった頃の感染者数は全国で二百人くらい。今、振り返ると奇跡の谷間でした。だからこそ、看取りに入った時、父が会いたがっていた教え子さんたちにも来ていただくことができました。しかし、お葬式となると話は別です。もし、ヒト・ヒト感染などが出たらと思うと怖くて決断できません。一方で、「最後に皆さんとお別れしたいよね。お父さん」という思いもありました。そこで、限られた方だけに連絡をとらせていただきました。親戚と門徒総代さま、自治会の組長さん、そして退職後も父に時々お電話をくださっていた先生でした。コロナ禍でしたが、ご参列してくださる方がいらっしやり、とてもありがたく感謝の気持ちでいっぱいになりました。

お葬式では喪主としてご挨拶しました。その時、感じたままにお話をしたので、内容を覚えていません。ただ、ウルウル

しながら言った「今日は、子離れできない父と親離れできない娘の卒業式です」という言葉だけは、鮮明な記憶として残っています。足腰が弱った父のお供として、教え子さんとの食事会や職場の退職者の会など、いつも一緒にくっついていた私。コロナ禍になってから私のステイホームは父が亡くなるまで続き、約一年半ずっと二人一緒でした。父から「〇〇して〜」と呼ばれる度に、私は「子離れしてよ〜」と言っていました。父亡き今、私が親離れできていなかったことに気が付きました。夜、とても広い本堂で、私は亡き父と一緒に最後の時を、久しぶりにゆっくりと過ごしました。シーンとお供えに囲まれた父の柩がありました。そして、父の遺影のちようど真上にライトに照らされて浮かび上がった阿弥陀如来さま。その光景は、とても幻想的で、まさにお浄土から父をお迎えに来てくださったかのよう。実家の本堂で皆さまとお別れし、父はお浄土へ。「子離れできない父と、親離れできないひとり娘の卒業式」が、無事に終わったのでした。お葬式を終えて、遺骨とともに自宅へ。数日前まで、父と過ごしていたのに、父はいません。「お母さんと一緒に納骨してほしいから、納骨は当分先ね」とかつての父。約二十年の時を経てお仏壇の前に父と母の骨壺が並びました。一緒に納骨するからね!



### 6月の行事予定

大成講 一日(土)

ヨガ教室 八日(土)

東別院募金活動 十二日(水)

仏教講座(玉泉寺) 十五日(土)

写真クラブ 十五日(土)

文芸クラブ 二十日(木)

### 今月の掲示板

ミッション  
ミッション  
ハイテンション

斎藤 孝

◆ hightension (上機嫌) に passion (情熱) をもって mission (使命) に当たれ! ということでしようか? 少々暑苦しいのですけれど。心理学者 V・E・フランクルによれば、私たちにはすでに「人生」から、するべき使命が届けられているのです。

### いずみのほり

◆ 仏教講座が十五日、石田の玉泉寺さんで開かれます。三和町各地域の総代さんにはご参加ください。いずれ住職が総代さんに依頼状と参加費の納入願いを持参いたします。午前中で終了しますので、お忙しいところ恐縮ですが当日よろしく願います。

◆ 去る五月二十二、二十三日、再び、七尾市の宝幢寺を訪れました。ハザード会では私が参加しました。でらボラ名古屋の企画に便乗させてもらいました。前回と同じように、教務所に一泊し、翌日、お寺を訪れました。写真にあるように、ずいぶん瓦礫が撤去されて、すっきりしました。当日は、お墓の掃除や、瓦の移動、雑糞とした作業をしました。◆ すぐ裏に、西念寺というお寺がありました。そこは伽藍すべてが倒壊していました。まだ、手が付けられていません。私たちは最低限の作業をしました。通路を確保するために、材木の片付けをしようとしましたが、覆いかぶさる屋根瓦の為に、危険と判断し、近くの瓦礫撤去を少し行いました。◆ 専門家の解体業者に任せようが安全と判断しました。◆ 宝幢寺の内陣は倒壊を免れ、4人の宮大工さんたちが補強作業をしていました。二十二才の棟梁はじめ、十九才と二十一才の若手大工さんたちが働いていました。「かっこいいからなりました。」という話には日本の伝統建築の未来に期待しました。◆ 3Kと言われている現場で仕事に誇りを持って頑張っている若手たちの顔が輝いて見えました。◆ 宝幢寺の家族も元気で、再開を喜んでくれました。「継続せよ!」という言葉が爽やかな五月の風がささやきかけてくれた一日でした。

